トラブル、その三

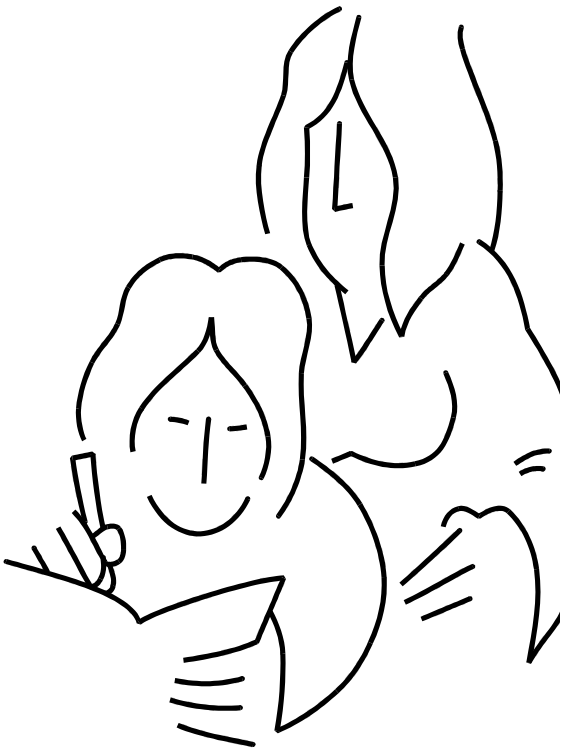
松本康子

海外での子育てでは、日本の時とは異なる経験をします。その経験を通して、アメリカ文化や日米の違いなど、非常に多くのものを学びます。まさに、「子どもと共に、保護者も育つ」のです。その成長のプロセスを語っていただきます。

何のトラブルもなく日常生活を送っていると、子ども達がどのようなカルチャーを身につけているかなど、考える機会がない。今回、次女が巻き込まれた友人の家出騒動を例に、わが子との間の異文化体験をお話したい。

☆

次女の友人を仮にＪちゃんとする。話したことも、会ったこともないそのＪちゃんのお母さんから、ある日突然電話をもらった。「Ｙ（我が家の次女）はいる？」と、興奮状態で話し出した。朝、学校へ送り出す際、放課後は友達と一緒に図書館へ行くと言っていたので、次女は留守だった。Ｊちゃんの母親にそう伝えると、「うちのＪも一緒なの？　何時ごろＹは帰ってくると言っていたの？」など、矢継ぎ早に聞いてきた。どうも様子がおかしいので、どうしてそのような質問をするのか聞くと、それに答える事もなく「Ｙが帰ってきたらすぐに電話させて。」と、一方的に電話を切ってしまった。



Ｊちゃんの母親の失礼な態度に気分を害しはしたが、次女が帰宅してすぐに、ことの次第を話してＪちゃんの母親に電話させた。彼女は私にしたような質問をもっと細かく次女にしたようだが、「Ｊちゃんとは図書館で別れ、その後、他の友人とどこかへ行ってしまったから、どこにいるのか分からない」と、答えていた。私はてっきり、Ｊちゃんが親の許可を得ずに図書館へ寄り道し、母親が帰りの遅い娘を心配して、心当たりに連絡を取っているものだとばかり思っていた。

ところが、子ども達と寝る支度をしている夜も遅い時間に、今度は、Ｊちゃんの両親二人から私に電話がかかってきた。Ｊちゃんの父親はいきなり声高に、「Ｙが娘の家出に手を貸し、何度も娘の行方を聞いているにもかかわらず、知らないの一点張りだ。居所を知っているのに故意に隠している。」「もし私たちに居所を正直に教えないなら、娘の家出を警察へ届け出て、Ｙを調べてもらうから、そのつもりで。」と、脅迫めいた口調で言い出した。ここに至ってやっと、私にも次女の周辺で何事が起こっているのか理解でき、びっくりして次女に状況を問い正してみた。

次女は、Ｊちゃんの母親に説明したとおり、図書館で別れて以後のことは何も知らないと言う。次女が関係していないことなら、相手が言っていることは家庭の問題だと判断し、次女のためにも「お嬢さんの家出について言うなら、それはそちらの家庭の問題だ。また、警察へ届ける、届けないということもあなた方両親の問題であり、次女には一切関係ないことです。」とはっきり答えた。

交通違反以外で警察と関わりあうなどとは夢にも思わなかったが、しばらくすると、本当に、警察官から我が家へ電話がかかってきた。「Ｊちゃんの親からの訴えで、彼女の家出について質問したいのだが、お嬢さんは18歳以下の未成年者だから、親の許可が必要だ。許可してもらえるか。」と聞かれた。娘がＪちゃんについて私に言ったことに嘘はないと信じていたが、「自分自身で答えたくなければ断ってあげるけど、どうする？」と、次女に聞い